

青年期非臨床群の風景構成法作品の特徴

—構成・彩色及び作品変化の観点から—

古川 裕之

1. 問題

風景構成法は中井（1970）によって創案された描画法の1つで、精神科臨床に限らず、様々な臨床場面で用いられている技法である。風景構成法作品をどのように読み取るかについては、これまで皆藤（1994）などで読み取りに関する指標がいくつも示されているが、臨床場面で用いられる描画法としての性質ゆえに、完全な指標化にはなじまず、それゆえ、多くは心理療法の中で描かれた風景構成法作品が描き手であるクライアントのどのような状態を反映し、また経過の中でその作品がどのように変化していき、それがどのような意味を持つのかといったことが検討されてきた。その一方で、非臨床群を対象として量的研究も行われており、その代表例としては高石（1996）が行ってきた、自我発達との関連で横断的な作品変化を捉えた一連の研究が挙げられる。

臨床場面において風景構成法を用いる時期・頻度は「挿間的に」「大体身体疾患において X 線撮影をするのと同じ timing」（中井，1972）で実施し、読み取りについては「縦断的に眺めることが必要であり、一枚の風景構成法から多くを読み取りすぎることが戒められる」（中井，1996）と述べられているように、相対的な作品変化の中で、描かれた作品に、描き手や治療状況のどのようなものが反映されているのかを検討していくこととなる。しかし、古川（2010）が述べるように、どの程度の作品変化を「変化」したものとみなすかということは、描き手間で異なるものと考えられる。このことは、中里（1984）が絶対的指標による検討ではなく、相対的指標による検討が必要だと述べていることとも通じる。さらに、角野（2004）が示すように、統合失調症患者の治療で風景構成法を用いる場合、作品の構成の回復と治療の進展が平行に進む場合があり、両者がある程度相関していると考えられる一方、中井（1983）や角野（2006）が示すように、必ずしも描き手の状態の変化と作品変化が一致するわけではない。このことは風景構成法が技法として限界を持つことを示すものではあるが、作品の「変化」をどの水準で捉えるかという観点を考慮に入れて検討していく必要性を示唆しているものと筆者は考える。つまり、技法の名前に冠されているように、この技法は「構成」という側面を非常に重視するため、構成の変化が当然重視されるが、中里（1984）が、「風景構成法において『変化』が最も著しくみられる側面を一つだけ挙げるとすれば、それは彩色面である。描線よりも彩色のほうに『変化』が生じやすいというのは、構成法の理念からすれば逆説的かもしれないが、事実はそのようである」と述べていることや、あるいは学生相談で風景構成法を用いた渡部（2005）が、「描出された系列描画では概して構成面での変化が少なくわずかな描画変化のな

かに CI の変化を読み取ってゆくこととなる」と述べているように、構成の変化に限らず、たとえ微細な変化であっても、時にはそれが重要な意味を持ちうると考えられる。もちろん、構成に限らない多面的な作品変化を基に、描き手の心理状態を読み取ることは、実際上行われていることであろう。

このように考えてくると、風景構成法の作品変化を捉えていく際に有効となる視点はどのようなものなのかを改めて検討する必要があると筆者は考える。大枠では、皆藤（1994）が非常に細かくかつ多数の指標を用いて風景構成法の再検査信頼性を確認していることから、基本的にはどのようなアイテムも一定程度“変化しにくい”とすることができる。佐々木（2008）が非臨床群の描き手を対象として6回の風景構成法を実施し、空間構成の安定性を実証しているが、これもこの技法の特徴である構成の変化（安定性）に特化したものと言えるだろう。しかし、皆藤（1994）が「大景群から近景群に至るほど信頼性の高い指標が減る」と述べていることから、構成には必ずしも関連がない側面についての安定性も検討が必要である。

ところで、松井（2009）が述べるように、風景構成法は構成過程だけでなく、彩色過程にもその重要性が認められる。彩色過程における描き手の体験の重要性は当然として、結果として作品に表現される彩色の特徴も重要なものであり、その変化を捉えることは、風景構成法の読み取りにおいて重要と言える。当然これまでの研究でも、彩色の変化については検討されており、例えば皆藤（1994）では、作品全体での彩色面積・彩色の濃さ・混色を、個々のアイテムでは全彩色・混色についての再検査信頼性の検討を行っている。これまでの先行研究の中から松井ら（2012）が作成した彩色指標は、個々のアイテム別ではなく、作品全体で指標に該当するかどうかの検討を行っている。個々のアイテムの彩色特徴を捉えることも重要だが、彩色に関しては、どのアイテムを塗ったかをいったん保留した上で、「どう塗ったか」という観点からの検討も重要であると筆者は考える（理想的にはどのアイテムをどう塗ったか、という細かな分析が本来は必要である）。なお、松井ら（2012）で作成された彩色指標は、同一の描き手が複数回風景構成法を実施した際に安定して該当するものであるかどうかの検証はまだなされていない。そこでまず、心理的な変化や精神状態の特別な変化がないと仮定される非臨床群の描き手を対象とした調査研究で、複数回風景構成法を実施し、これまで再検査信頼性や空間構成の安定性といった形で確かめられてきた、構成や大景群のアイテムの変化（安定性）と共に、彩色特徴の変化（安定性）についても合わせて検討を行う。その上で、風景構成法における作品変化（安定性）を構成・アイテム・彩色の観点から捉えることを目指したい。

なお、作品の構成については、高石（1996）の「構成型」を用いて検討を行うこととするが、作品の構成を決定していく大景群アイテム間の関係や、描画空間を仕切る枠との関係も交えて検討を行う。具体的には、山中（1984）が重視し、渡部（2005）も検討を行っている川と道の関係、また柳沢ら（2001）が検討している、枠づけされた空間を最初のアイテムである川でどのように構造化していくかという川と枠の関係も合わせて、作品の構成について検討することとする。また、アイテムについては、本来全てのアイテムを検討対象とするべきであるが、今回は弘田ら（1988）や渡部（2005）といった臨床群の描き手でも着目されている人について扱うこととした。なお、皆藤（1994）は「人物像と他の項目との位置関係や人物の動きをも含めた『風景の中の人物像の位置』という視点」からの検討の必要性を述べており、渡部（2005）

も、人の運動の質や他のアイテムとの関連の検討を行っているが、本研究では、描画を見て判断できるものとして人の数と形状のみを検討対象とした。

2. 目的

非臨床群の大学生・大学院生（以下「大学生」とまとめて表記する）を対象として実施した風景構成法について、青年期の描き手を対象として行われた先行研究での構成型の分布や、臨床群の作品を基に作成された松井ら（2012）の彩色指標の出現率と同様の傾向を示すかを確認する。また、複数回実施した場合の作品変化（安定性）を構成、彩色、アイテムの観点から検討する。これらを通じて、青年期非臨床群の風景構成法作品の特徴を明らかにし、作品変化を捉える際に有効となる視点を見出すことが本研究の目的である。

3. 方法

【収集方法】

本研究で分析対象とする風景構成法作品の収集は、全て筆者が個人面接形式で行った。実施時期は2003年～2008年である。なお、これらの調査は複数の研究目的で実施したものであり、必ずしも同一の条件で描き手の募集が行われたわけではない。描き手は50名で、1回のみの風景構成法実施が30名、2回以上の実施が20名（2回3名、3回15名、4回2名）であった。50名を対象として実施した合計89枚の風景構成法作品を分析対象とした。50名の内、男性が25名、女性が25名、描き手の初回時平均年齢（標準偏差）は20.8（1.9）歳であった。

複数回実施者20名の内、1回目と2回目の実施間隔は最小で16日、最大で1366日、中央値（四分位偏差）は31日（8.5）で、2回目と3回目の実施間隔は最小で25日、最大で790日、中央値（四分位偏差）は31日（3.5）であった。4回目を実施したのは2名で、3回目からの実施間隔はそれぞれ571日・1081日であった。このように、「複数回実施」と言っても、描き手間で実施間隔に非常に大きな差があるため、これらの描き手の描画を同列に扱うことは本来問題がある。しかし、中井（1996）が「空間の単数的統合性と遠近法的整合性および色彩の印象派以前の平凡性」の「三項目を揺るがすような大きな変化が、分裂病からの回復を初めとして、人生の大きな変化の際にしか起こらない」と述べていることを考えると、確率的には実施間隔が大きくなればなる分、作品変化が起きやすいと想定されるが、今回の研究では、全ての描き手が全ての実施回で少なくとも本研究の調査時に精神的不調をきたしていたとは考えにくいことから、施行間隔の長短によって中井が言うような意味で作品が大きく影響を受けることがないという前提に立って、分析を行うこととする。ただし、この前提自体についても本来は検討を行うべきであるが、これは今後の検討課題としたい。

なお調査実施時、描画後のやり取り（PDI ; Post Drawing Interrogation）ではほぼ同様の質問（作品の季節や時刻など）をしているが、今回はPDIで得られた情報は用いず、描画作品のみから判断できることで作品を分析し、その結果を基に論じることとした。

【指標】

分析において用いる指標は問題部分で触れた、風景構成法に関する先行研究から基本的には

選んで用いることとした。構成に関する指標は高石（1996）の「構成型」（表 1）を中心とし、山中（1984）を基に「川と道の関係」と、柳沢ら（2001）を基に「川と枠の関係」を用いることとした。人に関する指標は渡部（2005）が用いている記号人～具象人への分類を用いることとした。彩色に関する指標は、松井ら（2012）の作成した指標を使用することとした。以上から、今回の研究で用いる指標は以下の通りとなる。

表 1 高石（1996）の構成型と分類基準

I 羅列型	全要素ばらばらで、全く構成を欠く。
II 部分的結合型	大景要素同士はばらばらだが、大景要素と他の要素（中景・小景）とが、一部結びつけられている。基底線の導入が認められることもある。
III 平面的部分的統合型	大景要素と他の要素の結びつきに加えて、大景要素同士の構成が行われている。しかし、それは部分的な統合にとどまり、「空とぶ川」「空とぶ道」などの表現が見られる。彩色されていない空間が多く残り、宙に浮いた感じが特徴的である。視点は不定で、複数の基底線が使用されている。遠近・立体表現はない。
IV 平面的統合型	視点は不定多数だが、視向はおおむね正面の一方に定まり、全ての要素が一応のまとまりをもって統合されている。しかし、遠近・立体的表現は見られず、全体として平面的で貼りついたような感じが特徴的である。奥行は上下関係として表現されている。
V 立体的部分的統合型	視向が正面と真上（あるいは斜め上方）の2点に分かれ、部分的に遠近法を取り入れた立体的表現が見られる。しかし、大景要素間でも立体的表現と平面的表現が混在し、全体としてはまとまりを欠く分裂した構成になっている。「空からの川」など画用紙を上下に貫く川の表現が特徴的であり、その川によって分断された左右の世界が、二つの別々の視点から統合されていたりする。鳥瞰図や展開図的表現が見られることもある。
VI 立体的統合型	視点・視向とも、斜め上方あるいは正面の1点におおむね定まり、全体が遠近・立体感のあるまとまった構成になっている。しかし、「平面的な田」「傾いた家」など一部に統合しきれない要素を残している。
VII 完全統合型	一つの視点から、全体が遠近感をもって、立体的に統合されている。

〈構成・アイテムに関する指標〉

①構成型… I 型～VII型の 7 種類から選択。

②人

人の数…実数

人の形状…記号人・胴部に膨らみのある記号人・白抜き・具象人の 4 種類から選択。なお、2 種類以上に該当する人物が描かれている場合は、より具体的な形態を備えた方に評定することとした。

③川と道の関係…山中（1984）を基に分類項目を追加し、平行・川に沿う道・交わる（川を渡る）・接触する（川を渡らず）・T 字・平行した二筋が橋で繋がっている・いずれでもない、の 7 種類から選択することとした^{（註1）}。「川に沿う道」・「T 字」は山中（1984）にない項目だが、今回作品の分類を行っていく上で、他の指標に該当するものとは表現が異なると判断したため、新たに作成した。「平行」は、川と道が接触しない形で平行関係（交わらず、またおおよそ一定

の距離を保つ)を持つ場合とした。「川に沿う道」は川の片岸もしくは両岸に沿う形で道が描かれている場合とした。「交わる」は橋などを用いて、川と道が交差する場合とした。「接触する(川を渡らず)」は、道が川に平行関係ではなく、接触するが、反対岸には渡らない場合とした。

「T字」は道が川に接触するが、接触した道が川に沿って走っているため、ちょうどT字型の道になっている場合とした。「平行した二筋が橋で繋がっている」は、川の両岸に描かれた道が橋で繋がっている場合とした。上記のいずれでもない場合、もしくは複数該当の場合は、「いずれでもない」とした。

④川と枠の関係…柳沢ら(2001)を基に、此岸なしの川・左右の枠を結ぶ水平の川・左右の枠を結ぶ斜めの川・上下の枠を結ぶ垂直の川・上下の枠を結ぶ斜めの川・上枠と横枠を結ぶ川・下枠と横枠を結ぶ川・先細りの川・山から流れ出す先細りの川・隅の川・途切れた川・対角線・下枠に接する途切れた川、の14種類から選択することとした。「対角線」「下枠に接する途切れた川」は柳沢ら(2001)にはない項目だが、今回作品の分類を行っていく上で、他の指標に該当するものとは表現が異なると判断したため、新たに作成した。

(彩色に関する指標)

⑤重色 ⑥余白の彩色 ⑦枠からはみ出し ⑧縁取り ⑨アイテムの塗り残し ⑩不自然な色選択 ⑪塗り分け の7種類について、それぞれ該当するかどうかを検討した。なお、余白の彩色と枠からはみ出し以外については、該当する場合、どのアイテム・箇所であるかも合わせて評定したが、今回はこの詳細について扱わず、指標に該当したか否かのみを検討対象とした。

【評定手順】

全89枚の風景構成法作品について、次のような手順で評定を行った。

各指標の判定については臨床心理士資格を持つ大学院生で風景構成法の知識を十分有する者と筆者とでまず別々に行った。2名による評定一致率は、構成型では62.9%だった。高石(1994)にならい、一段階のずれを含めた一致率を算出すると86.5%だった。その他の指標の一致率は、人の数が96.7%、人の形状が86.5%、川と道の関係が84.3%、川と枠の関係が78.7%であった。彩色指標に関しては、重色が89.9%、余白の彩色が94.3%、枠からはみ出しが88.8%、縁取りが86.5%、アイテムの塗り残しが82.0%、不自然な色選択が89.9%、彩色のみでの表現が78.7%、塗り分けが91.0%であった。構成型の判定以外では概ね高い一致率が得られており、また構成型についても一段階違いでの一致率が80%を超えていることから、指標判定の客観性は一定程度保たれているものと判断した。全ての指標の不一致箇所については、もう1名の指標判定の際の意見を基に、改めて筆者が検討した上で、最も適切と考えられるものへと判定した。以下にその結果を示す。

4. 結果

ここではまず、初回描画50枚の作品特徴についての結果を述べる。

4-1. 構成型

大学生を対象とした高石(1994)、渡部(2005)で示されている構成型分布と合わせて、本

研究での構成型分布を表 2 に示した。VI型が最も多く、次いでV型、VII型の順となっており、ある程度の遠近表現が可能となるV型以降の3分類では、先行研究2つと同じ該当順となった。

表 2 構成型分布 (括弧内は%)

	I 型	II 型	III 型	IV 型	V 型	VI 型	VII 型	合計
本研究(初回時のみ)	0 (0%)	0 (0%)	2 (4.0%)	3 (6.0%)	14 (28.0%)	26 (52.0%)	5 (10.0%)	50
高石(1994)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (1.3%)	54 (36.0%)	58 (38.7%)	36 (24.0%)	150
渡部(2005)	0 (0%)	1 (1.5%)	9 (13.4%)	6 (9.0%)	17 (25.4%)	25 (37.3%)	9 (13.4%)	67

4-2. 人

描出された人の数の平均(標準偏差)は2.7(2.3)人だった。1人のみの描出が24枚(48%)、2人の描出が8枚(32%)、3人の描出が4枚(8%)、4人の描出が5枚(10%)、5人以上の描出が9枚(18%)であった。

人の形状では、記号人が25枚(50%)、胴部に膨らみのある記号人が8枚(16%)、白抜きが3枚(6%)、具象人が14枚(28%)であった。

4-3. 川と道の関係

平行が4枚(8%)、川に沿う道が3枚(6%)、交わるが11枚(22%)、接触するが9枚(18%)、T字が5枚(10%)、いずれでもないが18枚(36%)であった。平行した二筋が橋で繋がるは該当する作品がなかった。山中(1984)では、64名の青年期の描き手の川と道の関係を5分類しており、平行が22枚(34.4%)、直交(川を渡る)が26枚(40.6%)、直交(川を渡らず)が9枚(14.1%)、平行した二筋が橋で繋がっているが4枚(6.3%)、どちらでもないが3枚(4.7%)となっている。本研究で新たに作成した2分類(川に沿う道・T字)を除いた上で、山中(1984)の結果と χ^2 検定で比較したところ、本研究と各カテゴリーの割合に有意差が見られた($\chi^2=29.98, df=4, p<.01$)。残差分析の結果、本研究ではいずれでもないに該当するものが有意に多く、平行が有意に少なかった(表3)^(註2)。残差分析で期待値よりも有意に多い・もしくは少ない結果が得られた箇所には、数値の前にそれぞれ(+)・(-)を記載した。

表 3 川と道の関係(本研究で作成した2分類を除く)

	平行	川を渡る	接触する	平行した二筋が橋で繋がっている	いずれでもない	合計
本研究(初回時のみ)	(-)4	11	9	0	(+)18	42
山中(1984)	(+)22	26	9	4	(-)3	64
合計	26	37	18	4	21	106

4-4. 川と枠の関係

左右の枠を結ぶ水平の川が1枚(2%)、左右の枠を結ぶ斜めの川が6枚(12%)、上下の枠を結ぶ垂直の川が4枚(8%)、上下の枠を結ぶ斜めの川が6枚(12%)、下枠と横枠を結ぶ川

が 13 枚 (26%)、先細りの川が 5 枚 (10%)、山から流れ出す先細りの川が 5 枚 (10%)、途切れた川が 7 枚 (14%)、下枠に接する途切れた川が 3 枚 (6%) だった。此岸なしの川、上枠と横枠を結ぶ川、隅の川、対角線は該当する作品がなかった。柳沢ら (2001) の研究の内、大学生の描き手 58 名では、此岸なしの川が 1 枚 (1.7%)、左右の枠を結ぶ水平の川が 2 枚 (3.4%)、左右の枠を結ぶ斜めの川が 2 枚 (3.4%)、上下の枠を結ぶ斜めの川が 1 枚 (1.7%)、下枠と横枠を結ぶ川が 4 枚 (6.9%)、先細りの川が 21 枚 (36.2%)、山から流れ出す先細りの川が 26 枚 (44.8%)、途切れた川が 1 枚 (1.7%) だった。隅の川、上下の枠の結ぶ垂直の川、上枠と横枠を結ぶ川は該当する作品がなかった。本研究で新たに作成した 2 分類と、上枠と横枠を結ぶ川・隅の川を除いた上で、柳沢ら (2001) の研究と χ^2 検定で比較したところ、本研究と柳沢ら (2001) では各カテゴリーの割合に有意差が見られた ($\chi^2=43.57, df=8, p<.01$)。残差分析の結果、本研究では上下の枠を結ぶ垂直の川、上下の枠を結ぶ斜めの川、下枠と横枠を結ぶ川、途切れた川が有意に多く、先細りの川、山から流れ出す先細りの川が有意に少なかった (表 4)。

表 4 川と枠の関係 (本研究で作成した 2 分類と該当なしの分類を除く)

	此岸なし の川	左右の枠 を結ぶ水 平の川	左右の枠 を結ぶ斜 めの川	上下の枠 を結ぶ垂 直の川	上下の枠 を結ぶ斜 めの川	下枠と横 枠を結ぶ 川	先細りの 川	山から流 れ出す先 細りの川	途切れた 川	合計
本研究 (初回時のみ)	0	1	6	(+)4	(+)6	(+)13	(-)5	(-)5	(+)7	47
柳沢ら (2001)	1	2	2	(-)0	(-)1	(-)4	(+)21	(+)26	(-)1	58
合計	1	3	8	4	7	17	26	31	8	105

4-5. 彩色指標

彩色指標の該当数を、これらの指標を作成した松井ら (2012) で示されている該当数と合わせて表 5 に示した。

表 5 彩色指標の該当数 (括弧内は%)

	重色	余白の彩 色	枠からの はみ出し	縁取り	アイテム の塗り残 し	不自然な 色選択	彩色のみ での表現	塗り分け	合計
本研究 (初回時のみ)	36 (72.0%)	37 (74.0%)	41 (82.0%)	12 (24.0%)	19 (38.0%)	5 (10.0%)	10 (20.0%)	29 (58.0%)	50
松井ら (2012)	86 (52.4%)	88 (53.7%)	108 (65.9%)	49 (29.9%)	92 (56.1%)	27 (16.5%)	47 (28.7%)	80 (48.8%)	164

松井ら (2012) の作成した彩色指標は臨床群の風景構成法作品を基に作成したものであるため、今回の描き手である非臨床群の大学生では該当率が異なる可能性がある。そのため、指標毎に松井ら (2012) と該当率の差があるかどうかを、 χ^2 検定によって確認した。その結果、重色 ($\chi^2=5.21, df=1, p<.05$)、余白の彩色 ($\chi^2=5.72, df=1, p<.05$)、枠からはみ出し ($\chi^2=3.99, df=1, p<.05$)、アイテムの塗り残し ($\chi^2=4.33, df=1, p<.05$) でそれぞれ有意であった。残差分析の結果を含め、本研究と松井ら (2012) の間で各カテゴリーに有意差が見られた彩色指標について、以下の表 6 に示した。

なお、松井ら（2012）らの研究では、臨床群の児童から高齢者まで、幅広い年齢層の描き手を対象としているため、本研究と比較した場合、臨床群か否かという要因と、青年期かそれを含む幅広い年齢層かという要因の2つによって、出現率に差が生じた可能性が考えられる。そのため、彩色指標8つについて、松井ら（2012）らの中で20代の描き手による74枚と本研究の50枚について、 χ^2 検定によって比較検討を行った。その結果、アイテムの塗り残しにおいて、本研究と松井ら（2012）では各カテゴリーの割合に有意差が見られた（ $\chi^2=11.60, df=1, p<.01$ ）。残差分析の結果と合わせて表7に示した（註3）。

表6 彩色指標についての松井ら（2012）との比較（有意差が見られたもの）

重色	あり	なし	合計	枠からのほみ出し	あり	なし	合計
本研究（初回時のみ）	(+)36	(-)14	50	本研究（初回時のみ）	(+)41	(-)9	50
松井ら（2012）	(-)86	(+)78	164	松井ら（2012）	(-)108	(+)56	164
合計	122	92	214	合計	149	65	214

余白の彩色	あり	なし	合計	アイテムの塗り残し	あり	なし	合計
本研究（初回時のみ）	(+)37	(-)13	50	本研究（初回時のみ）	(-)19	(+)31	50
松井ら（2012）	(-)88	(+)76	164	松井ら（2012）	(+)92	(-)72	164
合計	125	89	214	合計	111	103	214

表7 彩色指標についての松井ら（2012）の内20代との比較（有意差が見られたもの）

アイテムの塗り残し	あり	なし	合計
本研究（初回時のみ）	(-)19	(+)31	50
松井ら（2012）の20代	(+)51	(-)23	74
合計	70	54	124

次に、継続実施した風景構成法作品の分析結果を述べる。

4-6. 複数回描画者の指標変化

佐々木（2008）に倣い、2回以上の描画を行った20名について、それぞれの回での構成型を表8に示した。「種類」は、その描き手の中で出現した構成型の種類を表す。20名中、複数回の描画の中で構成型が1種類だったのが14名、2種類だったのが6名であった。

次に、20名の2回の描画（3・4回目を実施した描き手は、1・2回目のみを対象とする）での変化の検討を行う。人の数について、対応のあるt検定を行った結果、2回目の方が1回目よりも有意に多かった（ $t=2.17, df=19, p<.05$ ）。人の形状では、1回目は記号人が8名、胴部に膨らみのある記号人が4名、白抜きが2名、具象人が6名だった。2回目は記号人が7名、胴部に膨らみのある記号人が5名、白抜きが2名、具象人が6名だった。 χ^2 検定では、各カテゴリーの割合に有意差は認められなかった。

2回描画を行った20名の内、構成型が変化したのが2名、人の形状に変化があったのは6名、川と道の関係に変化があったのは10名、川と枠の関係に変化があったのは12名であった。彩色指標では、一貫してその表現が見られるか否かを検討した（例えば、2回とも重色している場合も、2回とも重色していない場合もどちらも「一貫」しているとみなす）。その結果、重

色で 14 名、余白の彩色で 17 名、枠からはみ出しで 16 名、縁取りで 18 名、アイテムの塗り残しで 17 名、不自然な色選択で 16 名、彩色のみの表現で 18 名、塗り分けで 18 名の表現が一貫していた。構成型・人の形状・川と道の関係・川と枠の関係に変化があったか否か、また彩色の指標が一貫しているか否かを確認するため、二項検定を行ったところ、構成型では変化なしが有意に多かった ($p<.01$)。川と道の関係、川と枠の関係では有意な差は見られなかった。彩色指標では、重色以外の、余白の彩色・枠からはみ出し・縁取り・アイテムの塗り残し・不自然な色選択、彩色のみでの表現・塗り分けのそれぞれの指標で、一貫している描き手が有意に多かった (全て $p<.05$)。

表 8 2 回以上描画者の構成型の変遷

	1回目	2回目	3回目	4回目	種類
描き手1	Ⅶ型	Ⅶ型	Ⅵ型	Ⅵ型	2
描き手2	Ⅵ型	Ⅵ型	Ⅵ型	Ⅵ型	1
描き手3	Ⅴ型	Ⅴ型	Ⅴ型		1
描き手4	Ⅴ型	Ⅴ型	Ⅵ型		2
描き手5	Ⅴ型	Ⅴ型	Ⅵ型		2
描き手6	Ⅳ型	Ⅵ型	Ⅵ型		2
描き手7	Ⅵ型	Ⅵ型	Ⅵ型		1
描き手8	Ⅵ型	Ⅵ型	Ⅵ型		1
描き手9	Ⅴ型	Ⅴ型	Ⅴ型		1
描き手10	Ⅵ型	Ⅵ型	Ⅵ型		1
描き手11	Ⅵ型	Ⅵ型	Ⅵ型		1
描き手12	Ⅵ型	Ⅶ型	Ⅶ型		2
描き手13	Ⅴ型	Ⅴ型	Ⅴ型		1
描き手14	Ⅵ型	Ⅵ型	Ⅶ型		2
描き手15	Ⅴ型	Ⅴ型	Ⅴ型		1
描き手16	Ⅵ型	Ⅵ型	Ⅵ型		1
描き手17	Ⅵ型	Ⅵ型	Ⅵ型		1
描き手18	Ⅵ型	Ⅵ型			1
描き手19	Ⅵ型	Ⅵ型			1
描き手20	Ⅶ型	Ⅶ型			1

4-7. 複数回描画者の作品変化の質的側面

2 回の描画で構成型が変化しなかった 18 名中、川の向きの変化（真横・上下・右上→左下・左上→右下）が 4 名、川の形態（直線・曲線・蛇行）の変化が 4 名該当した。

20 名の作品特徴を全て詳細に記述することはできないが、構成型の変化で特徴的な描き手について取り上げる。構成型がⅣ型からⅥ型へと、20 名中唯一 2 段階変化した描き手 6 では、立体感が向上しているが、1 回目の平面的な作品をそのまま斜めに向け変えた構成であり、また彩色特徴については、一貫していた。次に、20 名中唯一構成型が下がった描き手 1 の作品は、2 回目までがⅦ型であったが、3 回目からⅥ型に下がった。作品としては、毎回川の位置が変化しており、特に 4 回目では此岸なしの川となった。

5. 考察

【初回時 50 枚から考えられる、本研究のにおける青年期非臨床群の景構成法作品の特徴】

5-1. 構成型

構成型はVI型が最も多く、全体の半数を超えていた。同じく大学生を対象とした高石（1994）と渡部（2005）の研究よりも、VI型の割合が若干高くなっているが、他の2つの研究と同じく該当数はVI型＞V型＞VII型という順となっており、今回の描き手の構成型は、先行研究と比較して大きな違いは認められなかった。ある程度の発達を経た青年期の描き手において、V～VII型の構成になるのは「発達より個性の問題」（高石、1996）であることが本研究でも当てはまると考えられる。

5-2. 人

今回の結果では、描出された人の数は平均約2～3人だが、半数が1人のみの描出であった。描出された人の数の多寡については他のアイテムの描出数と比較する必要もあるが、複数の人が描かれることは比較的少ないものと考えられる。

形状としては半数の描き手が記号化された人を描いていた。弘田（1986）の研究では、大学生（2～4回生）の36.8%が「記号化の人間像」を描いていることを報告しており、渡部（2005）の研究では、63.6%が記号人を描いていた。皆藤（1994）は人物像の記号化に関して、個別法での実施の場合は集団法よりもメッセージ性が高まるため、記号化が少なくなると述べている。また弘田ら（1988）は、「登校拒否群」では防衛が弱いために記号化が少なくなったと考えている（登校拒否群では23.5%、中学2年生の対照群では70.0%）。皆藤（1994）も「点景以外の人の記号化」が健常群に多いとしている。青年期の臨床群を対象とした渡部（2005）では弘田ら（1988）の結果と異なり、記号人の割合が高い。このように、記号人の出現率には先行研究でも幅が認められ、また、記号化を促す要因も複数あると考えられることから、今回の記号人の出現率が高いかどうかについては、さらなる検討が必要であると考えられる。

5-3. 川と道の関係

山中（1984）と比較すると、本研究では川と道の「平行」が少なく、「いずれでもない」が有意に多かった。この有意差は、おそらく分類上の問題に起因しているのではないかと考えられる。山中（1984）の分類であれば「平行」に分類されていると思われる、川と道の関係付けが弱い作品（山の中に道が描かれているため、両者がはっきりと隔絶している場合や、同一地平に描かれているが、位置がかなり離れているせいもあり、両者が関係を持っていそうで持っていない場合）については、本研究では「いずれでもない」に分類したが、山中（1984）に従うならば「平行」のカテゴリーに入れ直すべきか、あるいは「関係付けが不明瞭」といったカテゴリーを新たに設けるべきかもしれない。また、「いずれでもない」の中には、上記のような関係付けの弱い場合のみでなく、逆に関係付けが過剰とも言えるような、道があちこちにめぐらされているため、川との関係を単一に決め難いものも含まれていた。このように、「いずれでもない」に該当した作品を基に、新たな分類を作成することも必要と考えられるが、それを作成した場合には、該当する作品が描き手のどのような特徴を持つのかの検討も必要と考えら

れる。

5-4. 川と枠の関係

柳沢ら（2001）と比較すると、本研究では上下の枠を結ぶ垂直・斜めの川、下枠と横枠を結ぶ川・途切れた川が有意に多く、代表的な遠近表現とも言える、先細りの川と山から流れ出す先細りの川が有意に少ないという特徴が認められた。下枠と横枠を結ぶ川が最頻値となり、上下の枠を結ぶ垂直・斜めの川や先細りの川がそれに続くのは、柳沢ら（2001）の研究では、中学生～高校生にかけての表現特徴と言える。上下の枠を結ぶ、いわゆる「川が立つ」表現に近いものが多かったということからも、本研究の結果はやや遠近表現が弱かったと言える。また、途切れた川が多かったことから、道との関係同様、枠に対しても川が関係付けにくかったと考えられ、これらは、構成型の判定には影響を与えないものの、大景群アイテムの関係付けの弱さがあったことを示唆しているのではないだろうか。

5-5. 彩色指標

松井ら（2012）と比較すると、本研究では、重色・余白の彩色・枠からはみ出しが有意に多く、アイテムの塗り残しが有意に少なかった。ただし、松井らの研究の中でも、描き手の年代を本研究の描き手に近いと考えられる 20 代で統一したところ、アイテムの塗り残しのみ各カテゴリーの割合に有意差が見られた。このことから少なくとも、アイテムの塗り残しは青年期において、臨床群と非臨床群で出現率に有意な差があると言うことができる。この指標に関連して、皆藤（1994）は「無彩色の田」「無彩色の道」を病理指標として挙げているが、今回の描き手でも、道の塗り残しが多数認められた一方、田の塗り残しは認められなかった。また、道以外では、人や動物などの中近景群の塗り残しが比較的多く認められた。今回の検討では無彩色の箇所までは問わないこととしているものの、今後は、どの箇所の無彩色が、臨床群の指標となりうるのかについての検討も必要と考えられる。

アイテムの塗り残し以外で、松井ら（2012）らとの間で有意差が見られた重色・余白の彩色・枠からはみ出しについては、他の年齢層の描き手でも比較するなどして、これらの指標が臨床群に特徴的な表現なのかどうかを確かめる必要があるだろう。

なお、松井ら（2012）が作成した指標については、本研究においても該当する作品が認められ、上記の指標には出現率に有意差はあったものの、不自然な色選択や彩色のみでの表現の出現率は非臨床群でもそれほど高くないということも確かめられた。これらの指標は、年代や病理の有無による違いはなく、一定の割合で出現するものと考えても良いのではないだろうか。ただし、これらの指標が描き手のどのような特徴を反映しているかについてはさらなる検討が必要である。

以上のことから、本研究で得られた初回描画 50 枚の特徴をまとめると、これまでの大学生を対象とした調査研究と、ほぼ同様の構成型分布が得られたが、川と道の関係では平行関係が少なく、分類が困難な例が多数見られた。川と枠の関係からは、やや遠近表現が少ないと考えられる。よって、構成型では従来通りの傾向であるが、遠近表現や川の枠や道との関係付けと

いう点ではやや弱かったものと考えられる。人の描出は単数・記号化が多かった。彩色では、青年期臨床群と比べてアイテムの塗り残しが少ないということが挙げられる。

【継続実施時の作品の変化（安定性）】

5・6. 構成型とアイテムの変化から

20名の作品の構成型では、1名がⅣ型からⅥ型へと、2段階の違いが生じていたものの、その他全員では複数回の描画で構成型が全て同じか、変化していても±1以内の変動であった。これは佐々木（2008）が構成型の自然変動の範囲を1以内としていることと一致する。佐々木が述べるように、それ以上の変動が生じた場合は、描き手の何らかの変化を仮定することが可能と言えるのではないだろうか。

人については、数では1回目よりも2回目が有意に多かった。皆藤（1994）では、1人・2人・3人・4人・5人・6人以上の6分類に基づき、人の数の再検査信頼性が確かめられているが、本研究では異なる結果が示された。なお、20名中8名は一貫して1人のみを描いており、1名は一貫して2人を描いている。残り11名の内、2回目で増加したのが8名、減少したのが3名だった。総じて見れば統計的には有意な増加が示されているものの、約半数が同人数を描いているということからは、人の描画数がある程度一貫していることを示しているのではないだろうか。また、仮に数が増減する場合は、概して増加することが多いという特徴が挙げられ、減少する際には、何か心理的な変化を仮定しても良いのではないだろうか。なお、人の形状の変化は6名であり、有意差は認められなかった。以上のことから、人は形状（記号人が具象化するなど）の変化よりも、数を増やすという変化が見られやすいと言えることができる。

川と道の関係、川と枠の関係はどちらも半数以上において変化が見られた。川や道という風景全体の構成に大きく影響を与えるアイテムが変化しているにもかかわらず、構成型に大きな変化が見られないということからは、Ⅴ型以降のある程度遠近表現が可能となった状態において、構成型は比較的安定しているものの、構成型の変化にまでは繋がらない形で大景群アイテムをある程度自由に描くことができていると考えられる。単純な学習効果により、川の描画方法を変えているのかもしれないが、このこともある意味では、心の自由度や健康度の高さを表していると言えるのではないだろうか。2回の描画で構成型が変化しなかった18名中、川の向きの変化（真横・上下・右上→左上・左上→右下）、川の形態の変化（直線・曲線・蛇行）がそれぞれ4名ずつ該当したことは、決して数としては多くないものの、安定した構成の中でも、大景群アイテムの変化が生じていることの証拠の1つと言えるだろう。

なお、構成型がⅣからⅥへと変化した描き手6の場合、構成の変化に比して、彩色などによる作品全体の印象の変化が少ないという点が特徴であった。また、唯一構成型が下がった描き手1では、川の位置の変化が構成型に影響したと考えられる。ただし、構成型としては下がっているものの、1回目・2回目よりも3回目・4回目は全体に自由な感じで、多少の遠近や構成の乱れを気にしないで描いているという印象であった。これは上記のような、構成型の変化しない範囲で大景群アイテムを動かせる自由度の高さと通じるところがあるのではないだろうか。

5-7. 彩色指標の変化から

彩色に関する指標では、重色以外の一貫性が有意に高かった。そのため、ある描き手にとって、これらの彩色に関する指標は安定的に表現されるものと考えられ、気分や状況などに左右されにくい、パーソナリティ特性などを反映している可能性が考えられる。その一方で、一貫性が見られなかった重色については、その他の指標とは性質が異なる可能性が考えられる。松井ら（2012）は、重色を「本来、形がなく目には見えない」ものを表現する工夫としているが、同時に、色を重ねるということの際限のなさには「嗜癖のような終わりなき反復の危険」を秘めたものだとしている。今回、重色の一貫性が有意ではなかったということは、そのような際限のなさに関わってはならず、状況や気分など、様々な要因によって、重色をしたりしなかったりとなえられる自由度の高さが反映された可能性も考えられる。

以上のことから継続実施した作品の変化についてまとめると、構成型は安定しており、変動が ± 1 以内という佐々木（2008）と同様の結果が得られた。しかし、川と道の関係や、川と枠の関係からは、構成型に影響しない範囲で大景群をある程度自由に動かして描いていたと考えられる。また、彩色指標は重色を除いて一貫していた。構成型に影響しない範囲での大景群の変化と同様に、重色が一貫しなかったのは、非臨床群の描き手が、ある程度自由に描くことが可能だった（健康度がそれなりに高い）と言えるかもしれない。なお、今回の検討では川・道・枠を中心に大景群を考えたが、他の大景群アイテムである山・田も含めて今後は検討が必要である。

6. まとめと今後の課題

非臨床群の大学生を対象として実施した風景構成法作品では、以下のことが特徴として挙げられる。また、青年期非臨床群を対象とした本研究から示唆される、風景構成法の作品変化を捉える視点も合わせて提示する。まず、構成の面では、本研究では先行研究とほぼ同様のⅤ～Ⅶ型の3つの構成型に多くが該当するという結果が得られ、構成型分布の傾向を裏付けるものであった。構成型の変動については、佐々木（2008）と同様の安定性が認められたことから、構成型で ± 1 以上の変化が生じる際には、描き手の状態の変化を示唆しているものと考えられる。ただし本研究では、構成に影響を与える川と道や枠の関係から、遠近表現の弱さや、関係付けることが困難と思われる特徴が見られた。また、継続実施時に構成型のレベルでは安定していても、構成型が変化しない範囲で川を変化させるという、描き手の自由度の高さが認められた。これらのことから、構成型には反映されない形での作品変化を捉えるためには、川と道の関係のように、各アイテム間の関係を精緻に検討する必要があると考えられる。次に、人のアイテムでは記号人や単数での描出が多かった。継続実施時には、人の形状の変化はあまり見られず、数は増える傾向にあった。そのため、人の数が減る場合には、何かしらの描き手の心理的变化を仮定することが可能と考えられる。彩色については、年齢を統制した上での臨床群との比較でアイテムの塗り残しが多く見られた。なお、継続実施時、彩色指標は重色を除いて一貫しており、問題部分で触れた中里（1984）が述べるような、彩色が変化しやすいという指摘は、本研究では該当しなかった。中里は臨床群の描き手を対象とした経験則から上記のこと

を述べており、このことは非臨床群には当てはまらなかったと考えられる。あるいは、彩色のどのような特徴を捉えるかによっては結果が異なる可能性もある。例えば、塗りの濃さやタッチなど、指標化しにくい側面での彩色変化は生じている可能性もある。これらをどのように指標化するか、さらに、臨床群も含めて、彩色特徴が構成よりも変化しやすいかどうかは今後とも検討が必要である。その他の彩色指標は複数回実施時の一貫性が高く、これらの彩色特徴が変化する場合、同じく描き手の状態の変化を示唆すると考えられる。

このように、構成型や人の形状、あるいは彩色特徴など比較的一貫している風景構成法作品の特徴があると考えられるが、こういった安定した表現特徴のそれぞれが、描き手のどのような側面を反映しているのか、という点の検討は本研究では行えなかったが検討が必要である。例えば、構成型に変化がなく、彩色特徴が変化した場合、構成型が変化するが、彩色特徴は変化しない場合では、描き手の中で変化が生じていても、その変化の持つ意味、ニュアンスは異なることが予想される。

今後の課題としては、継続実施した際の作品変化を捉えるには、より多くの描き手による確認がまずは必要である。さらに、継続実施2回での検討ではなく、3回以上の実施時にどのような変化が生じるかも検討が必要である。また、本研究では描き手間で、風景構成法実施間隔に大きなばらつきがあるため、これをより統制した形で調査を実施し、その結果を検討することも必要である。また、本研究での試みは、先行研究を中心として、事前にあらかじめ作成した指標を基にした作品変化の検討であり、これは中里（1984）が言う「絶対的指標」による風景構成法作品の読み取りである。中里は、個別の描き手の作品の「相対的指標」を捉えることの重要性を指摘しているが、臨床事例・非臨床事例を問わず、個々の描き手の継続実施された作品変化を、どのような視点から捉えるかを抽出する試みも必要であろう。そして、その抽出された作品変化の視点が、他の描き手の作品にも当てはまるものであるかを検討していくことが今後の課題である。

註

(1) 山中（1984）による『道』と『川』の関係は、「紙数が足りない」という理由で、分類項目は示されているものの、それぞれの定義は明確になっていない。そのため本研究では、この分類に従い、新たな分類を追加し定義することとした。

(2) 検定に際しては、全作品89枚と他研究との比較も可能であるが、他の研究が基本的には初回描画のみを検定の対象としていることから、同条件で比較するため、本研究でも初回描画のみの50枚を用いて統計的検定を行うこととした。また、註(1)で述べたように、山中（1984）の「川と道の関係」の各分類は定義が不明瞭なため、本研究の結果と統計的検定で比較するのは不適当とも考えられる。そのため、この結果についての考察では、「川と道の関係」の分類自体を精緻に行う必要があることを指摘するに留めた。なお、上記のように山中（1984）の分類自体に限界があるため、本研究の結果を山中（1984）に基づき再分類を行い、その結果を再検定するという作業は行わなかった。

(3) 松井ら（2012）の論文では、8つの彩色指標の内4つについて、各年代の該当数が明示されていないが、今回著者にご協力をお願いし、該当数をご提供いただいた。

謝辞

調査にご協力いただいた皆さまには、心よりお礼申し上げます。また、未公表のデータをご提供いただいた、松井華子氏・千秋佳世氏には心よりお礼申し上げます。

文献

- 古川裕之（2010）：描画作品の変化の意味について—表現心理学からの検討— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 56, 223-235.
- 弘田洋二（1986）：風景構成法の基礎的研究 発達の様相を中心に 心理臨床学研究, 3 (2), 58-70.
- 弘田洋二・長屋正男（1988）：「風景構成法」による神経症的登校拒否の研究 心理臨床学研究, 5 (2), 43-58.
- 角野善宏（2004）：描画療法から見たこころの世界—統合失調症の事例を中心に— 日本評論社
- 角野善宏（2006）統合失調症の回復過程と風景構成法の関連性—3 事例の比較を通して— 箱庭療法学研究, 19 (2), 13-34.
- 皆藤章（1994）：風景構成法 その基礎と実践 誠信書房
- 松井華子（2009）：風景構成法の彩色過程研究の可能性について 京都大学大学院教育学研究科紀要, 55, 215-225.
- 松井華子・千秋佳世・古川裕之（2012）：風景構成法における彩色過程の基礎的研究 彩色指標作成の試み 箱庭療法学研究, 25 (1), 103-110.
- 中井久夫（1970）：精神分裂病者の精神療法における描画の使用 芸術療法, 2, 77-90.
- 中井久夫（1972）：精神分裂病の寛解過程における非言語的接近法の適応決定 芸術療法, 4, 13-25.
- 中井久夫（1983）：十余年後に再施行した風景構成法 芸術療法, 14, 57-59.
- 中井久夫（1996）：風景構成法 山中康裕（編）：風景構成法その後の発展 岩崎学術出版社 pp3-26.
- 中里均（1984）：急性分裂病状態の寛解過程における風景構成法の縦断的考察 山中康裕（編）：H・NAKAI 風景構成法 岩崎学術出版社 pp225-244.
- 佐々木玲仁（2008）：風景構成法における空間構成の安定性 甲南大学学生相談室紀要, 16, 53-62.
- 高石恭子（1994）：風景構成法における大学生の構成型分布と各アイテムの分析 甲南大学学生相談室紀要, 2, 38-47.
- 高石恭子（1996）：風景構成法における構成型の検討—自我発達との関連から— 山中康裕（編）：風景構成法その後の発展 岩崎学術出版社 pp239-264.
- 渡部未沙（2005）：継続面接における風景構成法の作品変化について 心理臨床学研究, 22 (6), 648-658.
- 山中康裕（1984）：風景構成法事始め 山中康裕（編）：H・NAKAI 風景構成法 岩崎学術出版社 pp1-36.

柳沢和彦・岡崎甚幸・高橋ありす（2001）：風景構成法の「枠」に対する「川」の類型化およびそれに基づく空間構成に関する一考察—幼稚園児から大学生までの作品を通して— 日本建築学会計画系論文集, 546, 297-304.

（臨床教育実践研究センター 助教）

（受稿 2012 年 9 月 3 日、改稿 2012 年 10 月 31 日、受理 2012 年 12 月 27 日）

**Characteristics of Landscape Montage Technique Drawn by Non-clinical
Adolescent Students:
From the Viewpoint of Construction, Color and Changes in Serial Drawings**

FURUKAWA Hiroyuki

This study analyzed the Landscape Montage Technique drawings of 50 non-clinical university students. Twenty students made more than one drawing. As a result, the distribution of montage patterns was almost the same as in previous studies. The parallel relation between river and road was significantly uncommon, and there were many examples for which classification was difficult. As a whole, there were a rather weak sense of perspective, and weak connection. In each drawer, the montage patterns were stable in the case of serial pictures. However, there were some cases in which the relations between river and road or between river and fence changed insofar as they did not affect the montage patterns. Almost half of the drawers drew stick-figure people, and drew only one person. The number of drawn people increased in serial pictures. With regard to color, the frequency of “colorless items” was significantly lower than in clinical coeval drawers. Thus, this index is considered to be specific for clinical drawers. With the exception of “overpainting,” the characteristics indicated by coloring indexes were also stable in the case of serial pictures. In a previous study, color tended to be the most changeable feature, but this was not true in the present study. This was thought to be due to the differences in drawers. Alternatively, it may have been due to differences in viewpoint on which we focused in analyzing color.